フランスの高校との電子会議の運営と評価

カリタス女子中学高等学校　山崎吉朗
yoshiro.yamazaki@nifty.com

本校はフランス語を媒介言語とした国際交流を推進するため、1992 年から現在のテレビ会議に継承される試みを行い、問題点、改善点を蓄積してきた。本研究ではまず過去の試みおよびそこから学んだものについて述べ、今回の電子会議について報告する。

1.　1992　ミニテルによる国際交流授業

ミニテルを利用した国際交流授業を 1992 年に行った。ミニテルとは電話番号帳の廃止の代わりに、専用端末をほぼ全家庭に無料配布した為に、日本と違いたいへん普及したフランスのビデオテックスである。日本でも、三井情報システムの専用回線を使い、ミニテルの専用機を購入しなくても、IBM PC の英語モードで、１分間 100 円で利用できた。現在のテレビ会議というレベルではなく文字だけのやり取りで、スピードもたいへん遅く、使いにくい電子掲示板という程度だったが、リアルタイムでフランスやイタリア、アメリカと文字のやり取りをすることができた。

このシステムを利用し、フランスの教育学者ドゥビゼール氏が企画した「コロンブス第５の旅（コロンブスは生前４回旅をした）」という物語共同作成作業に加わった。コロンブスがアメリカ大陸を横断して、太平洋を渡り、日本の鎌倉に漂着し、京都、奈良を経て長崎から旅立つという架空の旅行物語を、リアルタイムで交流しながら作り上げていくという試みである。関西学院大、甲南女子大、長崎外語短大と、日本からの参加は本校以外すべて大学で、フランス、イタリアの高校生と架空の物語を作り上げたのである。４日間に亘ったこの会議で得たものは次の通りである。

１　会議を進行する役割が必須（主催者のドゥビゼール氏が適切な指示を出していた）

２　互いの学校を紹介する事前準備が必須（学校紹介ビデオを作って事前に送っておいた）

３　会議での発言内容はよく準備しておく必要がある（学習という意味では準備の方が学習になる。事前に話題の展開についての指示が来ていたので、グループでストーリーを作成していた。）

４　参加する当事者の一部でも、実際に会って交流しておくことが大切（主催のドゥビゼール氏とは事前の学会で会っていた。さらに大学教員２名が事前に行われたフランス、イタリアでの試みに参加した。）

2.　1994 1995　NHK の番組への参加

番組制作のために準備した NiftyServe（現在の @nifty）の会議室上で事前に議論し、その議論を下に番組を構成するという NHK の試みに 1994,1995 年の２年間参加した。この企画は約 100 校の高校が参加して行われた企画だが、本校では当時はまだ自宅で電子会議に参加できる環境にある生徒はおらず、学校での空き時間で利用する程度では議論が盛り上がるところまでは行かなかった。他校も同様でごく一部の学校だけの書き込みしかなく、また、議論を進める牽引役もおらず、結局、議論を中心とした番組作りは１年だけで、２年目はテレビ電話を使った新規性とスタジオに集めた生徒の議論がむしろ中心となり、ネットワークを活かした番組作りとはならずに２年間で終了となった。ミニテルの時に得たポイントを改めて確認する結果となった。

3.　電子会議に至るまで

今回の電子会議に至るまでの経緯を述べる。

3.1.　国際交流

上記二つの試みの後、今回の電子会議に至るまで、アナログによる国際交流は進めていた。フランス大使館の紹介で行ったフランスの小学校や高校との交流、一橋大学の先生の紹介で行ったマルチニック（カリブ海のフランス領）との交流、直接現地に赴いたフランスの高校、ニューカレドニアの高校との交流で、ビデオの交換、特産物の交換、生徒個人でのメールのやり

取りやなどというレベルで経験は積んできたが、特に相手校の環境等が整わず、テレビ会議には至らなかった。ただ、列挙して分かるように、必ず間に誰かが入るか、当事者同士が知っている形での交流を進めてきた。交流を進めるためには交流を実のあるものにする必須の要素であると考えており、今回のテレビ会議実現の礎となっている。

3.2. テレビ会議の相手校

模索を続けてきたが、日仏高校交流プログラムと後述する別の企画のおかげでテレビ会議実現にこぎ着けた。

日仏高校交流プログラムは、2 年前からフランス大使館と進めている日仏の高校生の交換留学を促進する組織作りである。まず、２年前の秋に日本の校長３名が日本語を学習しているフランスの高校４校を視察、逆に昨年の春にフランス側の校長４名が来日して本校訪問、さらに、昨年秋に筆者が、パリのラ・フォンテーヌ校を訪問した。留学前の学校間交流の一つとしてテレビ会議の話が持ち上がり、今回の実現につながった。学校の雰囲気、学校の目標、生徒のレベル等、お互いによく理解した上での実現となった。

3.3. 技術的な問題とリハーサル

今回の企画とは別に進んでいた慶應義塾大学湘南キャンパスとの交流計画で、技術的な問題、事前のリハーサルの問題は解決した。

同大学のサーバーを利用し、nice to meet you というテレビ会議用のソフトを使えることで一挙に技術的な問題は解消した。Messenger や Net Meeting よりも画像、音声等に実用に耐えるもので、fire wall の問題もクリアーした。また、同大学のホームページからダウンロードした同じソフトを使うので、version が異なるとか、国による違い等がなく、設定もサーバーの IP を指定するだけの簡単なものなので、メールのやり取りだけでフランス側での準備も問題なく進んだ。

また、フランスといきなりテレビ会議を行うのは不安であったので、まず日本国内でのテレビ会議を行ってみた。本校生にもたいへん人気のあるテレビのフランス語講座の講師も務める慶應義塾大学の先生とテレビ会議を行った。技術的には問題なく、映像、音声共に実用レベルのものであることが確認できたのだが、６クラスで行ったそれぞれ 10 分程度のテレビ会議で、次のようなことがわかった。

１　事前の準備をしていないと、ほとんど話さない。
２　マイクの前以外では話すのだが、それが雑音となり、さらに会議を阻害する。
３　事前に準備したクラスでは順調に進む。

生徒達自身が強く希望して実現したテレビ会議だったので何も話さないというのは予想外であった。教員であれば雑談程度の、僅か 10 分程度のテレビ会議でも、あらかじめ、準備をしておかないと何も発言がないということがわかった。集団では動くが、テレビ会議は個人で発言するものである。そうなると突然押し黙ってしまうということがはっきりした。

3.4. 準備と２回の会議

上記の経験をもとに準備を進めた。

まずフランスの高校と、教員のみで nice to meet you が稼働するかどうか、問題点はないかどうかのチェックを行った。そこで、画像、音声共にクリアーなのだが、ディレーが国内で行っているより大きく、３-４秒ずれるということが始めてわかった。これに関しては現段階ではフランス側の回線状況が把握できず、今後の課題となっているが、ディレーを意識して本番のテレビ会議を進めることができた。

最初は高校３年生、２回目は中学３年生、相手側も同学年の生徒で行った。前述の反省を活かし、第一回目の高校３年生の時は事前準備を入念に行い、カメラテスト、マイクテストも一人一人で行った。テーマも決め、最初はバレンタイデーをテーマにした。２回目は急に決まったこともあり、自己紹介を中心にして行った。参加した生徒の満足度は高かった。６月には 3 回目の会議も予定されており、その結果も加え、会議の様子、評価については、発表の際に述べる。

4. テレビ会議に必要なこと

最後に、1992 年に得た国際交流に必要な４要素に次の３要素を加えたい。

１　一方的ではなく双方に利益があることが必要。今回は相手の学校が日本語を学習しており、積極的。
２　校長レベルで双方の高校を訪問しており、学校自体が推進していることが運営をスムーズにしている。
３　技術的なサポート（今回は慶應義塾大学）が重要